

ブルームフィールドの言語学説

——国語文法学への反省のために——

日 野 資 純

- 一、はしがき
- 二、国語文法学における未解決の問題
- 三、ブルームフィールドの言語・文法学説の概略
- 四、その学説の分析と検討
- 五、その学説を媒介としての国語文法学への反省
- 六、むすび

一、はしがき

国語学の各部門の中、文法論は音韻論や語彙論に比べて、永年の間かなり活潑に論議されてきた部門であるが、いまだ「定説」と称すべきものがないままに、色々な学説が並立しており、なお多くの論議すべき問題が残っている。それらの問題を解決せんとして従来種々な試みがなされているが、本稿では、その解決の一端に寄与するため、アメ

リカの言語学者レオナード・ブルームフィールド Leonard Bloomfield (一八七〇—一九四九) の学説を取上げたいと思う。私は数年前彼の名著『Language (言語)』に接して以来、それを検討することによって、より一層国文法研究に秩序をもたらし、又方言文法の研究にも光明が得られると確信するに至ったので、特に筆をとる次第である。殊に彼の学説の全貌はまだわが国に十分紹介されていないようであるから。^(註¹)

二、国語文法学における未解決の問題

まず現在の国語文法学において、なおどの程度未解決の問題が残っているかを考えてみよう。それについては国語学会編、雑誌『国語学』二十四号(本年三月刊)に、京都大学の阪倉篤義氏が「文法論の課題」として執筆しておられるが、氏によればおよそ次のような問題が「未解決」であることになる。

- 1、単語をいかにして認定するか。
- 2、文をいかに定義するか。
- 3、詞と辞、接尾語と助動詞の区別の問題。
- 4、品詞分類法の合理化。
- 5、各活用形の機能の探究。
- 6、「主語」「陳述」などの概念の明確化。

(同誌25ページ摘意)

なおこの外、氏は「未開拓」の分野として、シンタクスの論にアクセント、休止、イントネーションの論を含ませるかどうかなどを指摘しておられる。

本稿では氏の指摘された線に沿って論を進めるが、紙数の制限上この中特に4までの問題、および6の「主語」の

問題や、イントネーションの問題等を扱う。そして、それらの未解決、未開拓の問題が、ブルームフィールドの学説の導入によって、どのように解決あるいは開拓に導かれうるかを吟味したい。

なお従来の文法論においては、「意味」を重んずる立場と「形態」を重んずる立場とが対立していると見られるが、前者にもとづく文法論が多く、権威者たちによってかなり多方面から論ぜられてきているのに対し、後者にもとづく文法論は橋本進吉博士以後必ずしも十分継承発展させられてはいないように思われる。^(註²) もちろん橋本学説は現在もかなりの勢力を持つてはいるけれども、たとえば先に阪倉氏が列举されたような「未解決」の問題は、橋本学説のような形態を重んずる立場をもう一步推進することによって、解決のいとぐちがつかめそうに思われる。そこでそれをどのように推進するかを考えるに当って、かなり徹底した形態主義的機械主義的な立場を取っている所の、ブルームフィールドの学説を参照してみよう。

三、ブルームフィールドの言語・文法学説の概略

彼の主学説はその名著 *Language* (1933)^(註³) について見ることができるが、その特色はおよそ次の六項にまとめられる。

- (A) 心理主義的方法を極力排除していること。
- (B) 言語学の根本仮定を明らかにしたこと。
- (C) 人間の、外から観察しうる行動 (observable actions) に即して言語学の体系を組織し、そのさい、いくつかの基礎的概念を厳密に定義して、それにもとづいて、機械主義的手順で共時言語学の記述法を組織したこと。
- (D) 言語の音声的面を重視し、文法論をも、音声的事実に立脚して組織していること。

(E) 文法論において、形と職能とを特に重視していること。

(F) 文字を書くことは言語の補助手段にすぎないとしていること。

以下に(A)から(F)までの論点を補説する。

(A) 第九章意味論四節に次のように述べている。

「心理主義的心理学の信奉者たちの信ずる所によれば、ある言語形式の発話(utterance)に先立って、話手の中に思想、概念、心像(images)、感情、意志の活動のような非物質的過程が起り、聞手も同様に、音波を受取るに際して、それに相当する、あるいはそれに関連する過程をたどるということになるので、彼等は「思想、概念云々が即ち「意味」であるとすることによって」意味を定義することの困難さを避けようと信じている。(中略)心理主義者にとっては、言語は観念、感情、あるいは意欲の表現なのである。」(一四二ページ)

これに対し、著者自身の主張として、

「他人の心理的過程あるいはその内部の身体的過程は、ことば発話(speech-utterances)および他の「外から」観察しうる行動を通してのみ知られるものである。」(一四三ページ)

ところで、人間の言語活動の中、外から観察しうるものはその一部にすぎないから、著者に従えば、いわゆる意味の問題を含む他の大部分の言語活動を扱う時は、ある仮定(assumption)を立てねばならないという。即ち、

「意味というものの大部分を定義する方法がなく、又その恒常性を論証する方法がない以上、我々は、言語の特定の安定的な特徴を以て言語研究の前提(presupposition)とせねばならない。それはあたかも、我々が人間同志の日常の交際において「そういう特徴を」仮定するようなものである。^(註4)」(一四四ページ)

かくてこれはそのまゝ先にあげた(B)に直結する。即ち彼は「言語学の根本仮定」(the fundamental assu-

mpion of linguistics) として次のようなものを立てるのである。

「ある共同体（ことば共同体）においては、ことば発話の中に形式と意味の同様なものがある。」（九章五節。このほか五章三節にも同様な記述がある。^(註5)）

その意味を説明すればこうである。たとえばAが発した「おや？」という発話、Bが発した「おや？」という発話等は、厳密には音色その他の点で一回毎に異りうるものであるが、それらは形式および意味の点で著しい共通性を有するので一般にこれを「同じ」ことばというのである。厳密には異なるものを「同じ」とみとめること、こういう仮定によって言語学は成立するのであると。

これはソシュールがラングという概念を立てたことに通ずるものがある。^(註6) たゞしソシュールのラングは大腦中に位置する心理的實在であって、外から観察できないものであるのに、それを言語学の真正の対象であるとした点に大きな難点がある。これに対してブルームフィールドは右のような恒常性を認めることを一つの仮定であると明言したのであって、そこに方法上の進歩を認めることができるのである。たゞ彼はソシュールの学説については第一章でわずか三行述べているだけである。

(C) も (A) に関連している。即ち第二章言語の使用、二節にこう述べている。(二二—二三ページ)

「ジャック〔男〕とジル〔女〕とが小道を歩いているとする。ジルは腹がへっている。彼女は木にりんごがなっているのを見つける。喉頭、舌、唇を用いて「りんごを取って下さい」と声を出す。ジャックは垣を乗り越えて木に登り、りんごを取ってそれをジルの所へ持って来て手に握らせる。ジルはそのりんごをたべる。」

この一連の出来事は、多くの方法で研究できようが、言語を研究しようとする我々は、当然ことば行為 (act of speech) と、以後我々が実際の出来事 (practical events) と呼ぼうとする他の出来事とを区別するであろう。こ

のように見ると、この事件は時間順に「次のような」三部分から成立している。

A ことば行為に先立つ実際の出来事。

B ことば。

C ことば行為に続く実際の出来事。」

即ちジルがジャックに呼びかけるまでの出来事はAに当り、ジルが呼びかけたことはBに当り、ジャックがそれに応じてりんごを取って来たこと、そしてジルがそれをたべたことはCに当ることになる。なおブルームフィールドはこの出来事をシゲキに対する反応という観点から次のように分類する。

A 話手の実際のシゲキ。

B Aをシゲキとする、ことばによる代理反応。

C Bをシゲキとする、聞手の実際の反応。

彼に従えば、この場合B（ことば）が意味を持っていると言われるのは、それがA・Cと関係を有するからではあるが、言語学者の仕事はもっぱらこのBを観察することである、A・Cは現実界のさまざまの出来事を含み、あらゆる可能性を含むので、我々はこれを知りつくすことはできない、この場合でもジャックがジルを快く思っていないかったとすれば、たとえジルがことばで頼んでも、りんごを取ってやらなかったかも知れない、このようにA・Cを知りつくすことができない以上、言語学者としては、たゞ現実の「ことば」として現われるBだけを、唯一の研究対象とするのである、と。

ではそのBの分析、記述はいかになされているか。その方針は第八章音声構造の末尾に要領よくまとめている。

「そこで、一言語の記述は音韻論(phonology)に始まる。それは個々の音素(phoneme)を規定し、^(註7)どんな「音

素の「結合が現われるかを述べる。一言語に現われるどんな音素の結合でも、この言語において発音しうる (pronounceable) ものであれば、〔それは〕音声形式 (phonetic form) である。たとえば [mnu] という結合は英語では発音しないが、[net] という結合は発音しうるから音声形式である。

一言語の音韻論が樹立されると、いくつかの音声形式に対してどんな意味が附着されているかを述べる仕事が残る。記述のこの面は意味論 (semantics) である。それは通常、文法 (grammar) と辞彙 (lexicon) との二分野に分れる。^(註8)

意味を有する音声形式は言語形式 (linguistic form) である。たとえば英語のいかなる文、句 (phrase)、単語も言語形式であり、いわば maltreat「虐待する」の [mel] (中略) のような、意味をもつ音節も然りである。」
(一三八ページ)

かくて文法論は言語形式の研究の一部だということになるが、「文法」の定義は次の如くである。

「一言語における諸形式の有意味的排列 (meaningful arrangements) がその文法を構成する。」(十章文法形式四節、一六三ページ)

以上のごとく、その文法論は、音声的事実に立脚していることがみとめられるのであって、これは先に特色 (D) としてあげたことに相応するものである。以下にその主学説の価値を位置付け、さらにその文法論をくわしく検討してみよう。なお (E) は第十章に「選択の特徴」として説明され、(F) は第二章「言語の使用」の項に説明されているが、それについては次章以下で扱うことにする。

四、その学説の分析と検討

まず前節の最初にあげた(A) (心理主義の排斥)について。

この点は彼だけでなくアメリカ言語学全般にわたる大きな特色であるが、言語を「観念、感情、意欲の表現」と見るとは、わが言語学、国語学の永年の伝統のようなものであった。しかし、そのような言語観にもとづいた文法論がともすれば難解に走り、ある場合には研究者殊に初学者を敬遠せしめたことは、否認しがたいことであろう。橋本進吉博士の学説がもっとも広く普及したのは、やはりそれが言語の形態にもとづいていたために理解しやすかったからであろうと思う。ブルームフィールドはそういう形態主義的立場を更に開拓したと見られるのであるが、たゞ観念、感情、意欲というようなものを全く排除して言語の研究がなしうるかどうかにについては、まだ問題があらう。しかしたとえば諸方言の文法現象などの言語学的記述に際しては、言語事実に対する被調査者の主観的判断、あるいは調査者自身の観念的推測にたよりすぎると、事実の忠実な記録ができない場合が多いから、ブルームフィールドのこの提言を、それに対する警告として受取るならば、我々の研究方法にいろいろと寄与する面があるに違いない。

ところでそれに関連して問題になるのは(B) (仮定の設定)である。これは(A) (心理主義の排斥) からの当然の帰結であるとも言えるが、従来このことはむしろ理の当然として特に言及されなかったのを、彼が改めて明言したわけである。たゞ果してこれが言語学のみ仮定であるかどうかという点になお疑問が残るであろうである。彼自身も述べているように、それは我々の日常生活において暗黙の中にお互いに一つの共通の場を仮定して交際していることと通ずるものがありはしないか。そして言語学のみならず、むしろあらゆる科学がそういう仮定にもとづいているといえるのである。この点の究明は今後の大きな問題ではないかと思うが、とにかくそういう仮定の存することを明言したという点で、彼はまことにユニークな存在であると思う。

(C) (機械主義的方法) は(A) から必然的に導かれたものかと思われるが、これこそ彼の言語学の核心をなすもの

である。これは(D) (音声的面の重視)とも関連するが、こゝで注意すべきは、文法論の基礎となる言語形式が、まず発音の面から規定されていることと、文法即ち法則という考え方でなく、形式が意味を持つように「整頓」されることが「文法」を形作るという見方である。この第二の点は特に橋本学説における「文法」観と相違する。即ち橋本博士は「意味をもっている単位が結合して言語を構成する法則」が即ち文法だと見ておられたようであるが、この点(註9)が強調されすぎると「法則」に合わない言い方は「不正」のもの、合うものは「正しい」という考えに導かれやすい。この見方(正、不正の観念)がいかにか言語の科学的な記述的研究をさまたげるかは、ブルームフィールドが特に力説している点である。(註10)

さて彼の文法論の具体的な組織はどのようなものであるか。いよゝその点に立入らなければならない。Language 中の文法論は、全体の二十八章の中、十章から十六章までの、七章、四分の一を占めており、もっとも力が注がれている。(註11)そして特にその十章文法形式の項において、基礎的な分析がなされている。

即ち、いろゝな言語形式(その定義は前節に述べた)の中で、単独では話されることのないものを附属形式 (bound form) とし、その他のすべてを自由形式 (free form) と規定して、言語形式の二大別を行い、さらに「他のいかなる形式とも音声的意味的似寄りを持たぬ言語形式は、単純形式 (simple form) あるいは形態素 (morpheme) である。」(註12)としている。たとえば playing の -ing は附属形式であるが、play, playing, John, John ran 等は自由形式、そしてそれゝの構成成分である play, -ing, John, ran 等の一々はいずれも形態素になる。

さて先にも挙げたように、彼に従えばこれらの形式が有意味的に排列されることが文法を構成するのであるが、その排列の方法として次の四項を設ける。

「(I) 順列 (order) = 複合形式 (complex form) の話される継起順位。順列の意義は John hit Bill 対 Bill hit John

のような対比において顕著に現われる。他 * Bill John hit は英語の形式ではない、我々の言語はこれらの成分をこういう順列では排列しないからである。(下略)

②抑揚 (modulation) = 二次音素 (secondary phonemes) の用いられること。二次音素とは、いかなる形態素中にも現われず、形態素の文法的排列においてのみ現われる音素である。… (中略) 英語では形態素が単独で話されるとすれば、何らかの高さの二次音素が伴う。即ちそれは John₁, John₂ あるうは John₁(.) である (下略)。

③音声的修整 (phonetic modification) = 形式中の一次音素 (primary phonemes) が変化する事。たとえば do [duw] および not [nat] という形式が複合形式として結合されると、do の [uw] は通常 [ow] に置き代わる。そしてこの「置き代え」が起る時は必ず、not はその母音を失い、その結果、その結合形式は don't [downt] となる。^(註¹³) (下略)。

④形式の選択 (selection of forms) = 意味の一因子となる。なぜなら、他の点では文法的排列の等しい異った形式が、異った意味を生ずるからである。たとえば感歎的末尾高さで話される形態素中には、人を呼びつけるものや人の注意を促すものがあり (John! Boy!), 同様に話されるものの中には命令となるものもある (Run! Jump!) からである。」

次に選択というものの一特徴を述べるが、これはいわゆる品詞分類に関するもので、特に重要である。

「選択の特徴はしばしばきわめて勝手に気まぐれである。我々は prince, author, sculptor [彫刻家] を接尾辞 -ess と結合させて「女性名詞である」 princess, authoress sculptress (中略) を作るが king, singer, painter [画家] はそうしない。この習慣のために、前者の諸単語は、後者の諸単語が排除される所の形式部類 (form-class) [いわゆる「品詞」] の概念を進めたもの」に属するのである。」 (一六三—一六五ページ)

以上の中(3)は以下の Syntax, Morphology の章に細説され、(2)は Sentence-types (文型)の章、(3)は文法に関する章のすべてで随時扱われ、(4)は Form-Classes (形式部類)の章でそれぞれ扱われることになる。このようにこの部分はその文法論の骨子をうかがうものとしてきわめて重要である。又以上の中にはいろいろな新しい問題が示唆されている。

まず(2)において、いわゆる「文音調」(文末に加わる一定の調子)が文法上の問題として扱われていること、(3)において、二つ以上の形式が結合する時の音声変化も文法論の中で扱われていること、(4)において、通常同じく「名詞」とされるものであっても、接尾辞との結合の仕方が異れば別類のものとされていることである。

又先にあげたいろ／＼な言語形式の定義の仕方、区別の仕方が、音声言語的事実にもとづいて立てられていることも注目すべき点である。

即ち、この中(2)(3)は、この論文の第三章の始めで本書の特色としてあげた点(D)、(C)に当り、(4)はその(E)に当ることになる。又その(4)は先に阪倉氏が未解決の問題とされた点の3と4に、(2)は同氏が未開拓とされた問題の一つにそれ／＼該当するといえよう。なお氏の指摘された1、2についても彼は別に言及しているが、それは次節で附言しよう。

さて以上の文法分析法を検討すると、きわめて機械主義的であるとともに、あくまで音声言語的事実にもとづいている点が特に注目される。これをもし、あまりにも外形にとらわれすぎているという非難のみを加える者があるとするれば、それは心理主義に陶醉しすぎた者の、自己以外を認めることを知らぬ妄言にすぎない。もちろん、意味を過大評価する心理主義者たちは、この方法を「形式主義」と呼んであざ笑うかも知れない。しかし、抽象的論議をはなれて、この方法はきわめて応用のきくものであり、国語学における「未開拓」の点を「開拓」する力を有し、「未解決」

の点を「解決」せしめるだけの実効を持つのである。たとえば、方言における文法的事実の整理に当って、従来は橋本博士の学説を応用した研究がかなり多く、さらにやゝ心理主義的な藤原一博士の理論などが大きく提唱されているが、それらがいまだ決して十分なものでないことは、已に私が別の論文で指摘した通りである。^(註14)ブルームフィールドの附屬形式、自由形式の分類や、抑揚、音声的修整および選択の理論は、方言文法の事実の整理などに当って、従来の方法からぬきん出た新しい見地を開拓するものとして、実り多きものであると信ずる。殊に、方言の事象が音声言語的事実として現われることのすこぶる多いことを思い合わせる時、音声言語にもとづく彼の分析法が、方言文法の研究に大きな寄与をなすことは明らかである。その点の詳細については別に発表した論文を参照して頂きたい。^(註18)

五、その学説を媒介としての国語文法学への反省

こゝで改めて第二章にあげた「未解決」の問題へ立帰ろう。たゞし紙数の関係で5を割愛する。

1、単語認定の問題（語構成論を含めて）。山田・時枝両博士のように、それ／＼「言語における究竟的思想の単位」とか「思想の一回過程によって成立する言語表現」^(註15)とかを「単語」と認める方法は、「思想」なるものの定義が困難であるために、必ずしもすべての学者を納得させてはいないようである。そこにこの問題の未解決である所以が存するのであるが、ブルームフィールドに従えば、先に私の説明した彼の自由形式の中の最小のもの即ち最小自由形式（a minimum free form）が「単語」であるという。^(註16)即ちその属性は

一、発音しうる音素の結合を有し、（音声形式）

二、意味を有し、（言語形式）

三、単独で話されることがあり、（自由形式）

四、しかもその中で最小の形を有するもの。(単語)

ということになる。

この規定の仕方は、服部四郎博士によって更に進められている通り、その根本方針は十分日本語にも当てはまりうるものであって、又かくして規定された「単語」は我々の「言語意識」とも一致する。たとえば橋本文法などで「形容動詞」の「語幹」とされる「しずか、すてき、見事、きれい」等は、まれではあるが単独で話されることがあり、それ自身最小の形を有するから、「単語」と認められることになる。たゞし私は又別の考えを持っている。^(註14)

又ブルームフィールドの「附屬形式」の定義も服部博士がさらに前進させておられるが私はそれを更に下位分類して殊に方言文法の記述に役立たせようと努力した。^(註18)即ち単独では話されることがないものを附屬形式とするならば、それは必ず他に續けて話されるものであるが、その場合、他の形式の前に續くか、後に續くかによって二大別される(接頭形式、接尾形式)わけである。そしてその両形式をなお語形や職能によってさらに下位区分したのである。こうすると、「未解決」の問題の3に挙げられている「接尾語と助動詞の區別」の問題になやまされないですむことになる。なぜなら、いわゆる接尾語や助動詞は、すべて他の形式に續けて發話されるという点では同列に置かれるのであるから、その基準からいえば、これらはすべて先に述べた「接尾形式」に属することになる。そこを出発点とし、これらを一応同一線上に並べて、さらに形や職能から再分類することが望ましいのである。従来は、この両者の相違が程度の差にすぎない(橋本博士も「国語法研究」でそう述べておられる)にもかゝらず、「接尾語は単語の一要素、助動詞は一単語」という線に拘泥しすぎていたと思う。むしろこの線をはっきり捨て去った方が合理的な分類ができるのではないか。この見地に立ってみると、従来、複合語の構成要素と見られていたものや、助詞の一部、動詞形容詞の構成要素なども、結局解体されて接尾形式、接頭形式の一種として再分類されることになるかと思われる。

私が試みた分類を掲げてみよう。これは「言語研究26・27合併号」（二十九年十二月刊）所収の拙考を修補したものである。こゝでは接尾形式のみを掲げる。

a₁「水車」の「グルマ」、¹「本箱」の「バコ」など（頭の音素が他と交替しうるもので、規則的な、職能に応ずる語形変化なきもの）。

a₂「手離す」の「バナス」など（頭の音素が他と交替しうるもので職能に応ずる語形変化をなすもの）。

b₁「青木さん」の「サン」など。

b₂「甘さ」の「サ」、²「赤味」の「ミ」など。

b₃「日本人」の「ジン」、³「愛国者」の「シャ」など。

b₄「書けば」「書くならば」の「バ」。

b₅「書くな」「見るな」の「ナ」など。

b₆「起きよう」「見よう」の「ヨウ」など。

c₁「書かない」「書かず」の「ナイ、ズ」

（「ナイ√ナク、ナケレ」「ズ√ヌ」のような語形変化をなす）

c₂「書いて」「読んで」の「テ、デ」（「テ√タ、デ√ダ」）

c₃「書きます」「書きたい」の「マス・タイ」

c₄「春めく」「汗ばむ」の「メク・バム」など。

c₅「起きる」「食べる」の「ル」など。

d「大きい」「深い」の「イ」など。

e 「已に」「ほんの」の「ニ、ノ」

(hは職能に応ずる語形変化のないもの、それを更に職能によって下位区分した。cは職能に応ずる語形変化のあるもの、同じくそれを下位区分し、dはいわゆる形容詞の語尾、eはただ一種の形式にしかつかないもの)
右の諸項目に対する橋本文法の呼称を附記すると次のようになる。

a₁ a₂ b₃ 複合語の構成要素

b₁ b₂ c₄ 接尾辞

b₄ c₂ 接統助詞

b₅ 終助詞

b₆ c₁ c₃ 助動詞

d 単語の構成要素(形容詞語尾)

c₅ 〃 (動詞語尾)

e 「已に、ほんの」でそれ〃一単語(副詞、連体詞)

私の分類原理は次の如くである。まず、単独では用いられることなく必ず他の形式のあとに続けて発話されるものをえらび出し、頭の音素が他と交替しうるものとしないうものという基準でa bを二大別し、それ〃〃をさらに職能によつて分けた。b類にはなおいろ／＼なものを附加できよう。c類は職能によつて語形変化をなす、いわゆる活用をなすものであって、「書いて」などの「て」もその一種と見たが、(↓「た」)これは従来接統助詞とされることが多かった。又c₅は「レ、ロ」と活用すると見る。dは「ク、ケレ」と活用するが、「大きい、小さい」の類と他のいわゆる形容詞とはさらに下位区分されることになる。 「大きい、小さい」の類は体言に続く形に「大きい、大きな

の両形をもつからである。eの「ニ、ノ」は「すで・ほん」など、独立で用いられることのない形式（附屬形式）の中の、さらに限られたものにしか附かないから、特に別類としたのである。こういう考えもブルームフィールドの分析法に暗示された点が多い。

2、文の定義。これも心理主義的見解に従えば「具体的な思想の表現で、統一性と完結性を具えたもの」（時枝博士「日本文法口語篇」）、あるいは「単語を材料とし、統覚作用によって統合せられた思想が言語という形式によって表現せられたもの」（山田孝雄氏）のように規定されることになるが、「思想の表現」「統一性・完結性」あるいは「統覚作用」という概念をつきつめてゆくと、結局言語の「意味」に関係してくることになり、ブルームフィールド流にえば、それは外から観察しえず、容易に解明しがたいものだということになってしまう。そのために「統一性」とは何か、「統覚作用」とは何かということをめぐって議論百出して止る所を知らなくなる。そこでもっと形態の面からの規定はできないか。ブルームフィールドに従えば、

「ある言語形式がより大きな形式の一部として現われる時は包含位置にある (to be in included position) といわれ、それ以外の場合は絶対位置にあって (to be in absolute position) 文を形成するといわれる。（十一章一節）」

となる。たとえば Poor John ran away. における Poor John は包含位置にあり、Poor John₁ におけるそれは絶対位置にあって文を形成することになる。要するに、単独の言語形式あるいはいくつかの言語形式が、次の三種の高さの二次音素の中のいずれかを取って現われる時に「文」となるのである。

1. Poor John [₁] John ran away [₁]

2. Poor John [₂] John ran away [₂]

3. Who is poor John^[j] Who ran away^[j]

なほこの三者のそれ々には感動的二次音素^[j]が加わりうるから、文型は六種になるという。日本語の場合では

①もうやめる・「および」。

②もうやめる?「および」?!

のような区分が考えられるが、これだけには限られないかも知れない。文末の音調（イントネーション）の種類をもっと吟味する必要があるがとに角音調の面から文を規定することは十分可能であり、橋本博士や服部博士も考察しておられることである。又「包含位置」「絶対位置」の関係を応用すれば「さあ帰ろう。」の「帰ろう。」は包含位置にあるが、「帰ろう。」だけの場合は絶対位置にあって文を構成するということになろう。

4. 品詞分類法の合理化。これは先に1で述べた接尾語と助動詞の区別の問題に関係してくる。そしてブルームフィールドが「選択の特徴」としてあげたものと関係が深い。「職能が少しでも異れば異なるだけの部類を立てる」ということが彼の原則のようであり、私はその応用を先の接尾形式の分類として示したつもりである。殊に方言文法の分析のさいにこの点は十分応用できるであろう。又、これは6の「主語」の問題にも関連する。たとえば従来の「中等文法」（文部省、昭和二十八年版による）によると、その「名詞」の定義の仕方は、まず「『何が何であるか』を示す『何が』に当る文節を主語という」としてから、「『が』を伴って主語となる単語を体言という」と規定し、さらに「体言は又名詞ともいう」と説明する。つまり名詞という一品詞をきめる時、「何が何であるか」というような判断の形式を概念的にきめて、その「何が」に当る文節を「主語」とし、その「が」がついて主語となるものを「名詞」とするのである。ところでその「主語」の概念であるが、その形式上からの規定の仕方には少くとも二つの難点がある。その一は論理上の判断の形式をそのまゝ言語上の問題と考えること、その二は助詞「が」を使用しない方言で

はこの定義が適用できないという点である。

第一の点を考えると、日本語には「弱ったなあ」のようないわゆる「述語」だけの文も多いが、ふつうはこれを主語の省略と考える。しかし我々の言語体験に徴しても、これは当然あるべき「主語」である。「私は」を「省略」したのではなく、本来そういうもののない表現ではあるまいか。少くとも「弱ったなあ」だけで日本語として決して不自然ではない。即ち論理上の判断の問題と言語の問題とは別にして考えるべきものであろう。第二の点は「が」という助詞を常用しない東北方言の話し手に対して、この定義を教え込むことがいかに困難かを思えば、それが普遍妥当性を持たないことは容易に理解されるのである。その上に一般に日本語の音声言語では「主語」の現われることはむしろ比較的少く、私がかつて神奈川県の方言を録音したものの中(註19)でも、二十五分間の日常会話中、「主語」のない文が56パーセントもあった。本来この概念が印欧語の文法から輸入されたものであることを思うと、なおさら再検討の必要が痛感されるのであって、少くともそれを品詞分類の基準にすることは厳戒を要するといわねばなるまい。

六、む す び

以上本稿で述べたことを要約すると、国語文法学にはまだ種々の未解決の問題があるが、それらを解決に導くさいにブルームフィールドの学説を参照すると、直接間接に多くの便益を得るようになる。しかし彼の学説にも欠点がないのではなく、彼が研究者の主観的直接体験を排除しているために、言語の内面的問題である意味論などは必ずしも十分分析されていないし、又世界の言語の系統的分類についても彼はほとんどふれていない。しかしとにかくこゝではその学説のすぐれていると見られる面を特に取上げ、識者の御批判にゆだねた次第である。いずれにせよ、彼の学説が言語学史上きわめてユニークな位置を占めることは疑を容れないであらう。

【註】

- 1、国語学会編「国語学辞典」に「ブルームフィールド」という項目はのっているがくわしい解説ではない。ただしよく要領を得ているから参照されたい。
 - 2、橋本進吉氏「国語法研究」中の「国語法要説」
 - 3、New York, Henry Holt & Company.
 - 4、日常我々はお互いにある種の共通の場を想定して、交際しているといえる。
 - 5、§5.3「in every speech-community some utterances are alike in form and meaning」
 - 6、Ferdinand de Saussure: *Cours de linguistique générale* 1916.
 - 7、音素とは示差的音特徴の最小単位」 (§5.4)。
 - 8、semantics の中に grammar を含ませるのも彼の学説の一特徴であろう。
 - 9、「国語学辞典」巻末「国文法諸説対照表」。
 - 10、本書の第一章、第二章その他に見える。
 - 11、第十章文法形式 (grammatical forms) 、第十一章文型 (sentence-types) 、第十二章統語論 (syntax) 、第十三章形態論 (morphology) 、第十四章形態論の型 (morphologic types) 、第十五章代理 (substitution) 、第十六章形式部類と辞彙 (form-classes and lexicon)
 - 12、第十章第一節。
 - 13、なお「厳密にいえば *do not* の *not* (*na*) *u don't* (*nt*) とは別の形式だ」としている。
 - 14、「国語と国文学」二十九年五月号の拙稿。
 - 15、「国語学辞典」巻末、「国文法諸説対照表」
 - 16、第十一章五節。
 - 17、「コトバ」復刊二ノ十二、「具体的言語単位と抽象的言語単位」。「言語研究」十五、「附屬語と附屬形式」
 - 18、註14の拙稿、および「国語学」20の拙稿。
 - 19、昭和二十九年一月九日に神奈川県津久井郡内郷村（現相模湖町）で、その土地の老人数名の世間話を録音したもの。
- （追記） 本稿第二章の末尾にブルーム・フィールドが文字を書くことを言語の補助手段にすぎないとしていることを述べたが、そ

れについては彼が次のように述べていることを附記しておく。

「二章二節、書記(Writing)は言語ではなく、目に見える記号で言語を記録するための手段にすぎない。(中略)いかなる書記の組織がその「言語の」記録に用いられようと、言語というものは同様のものである。それは、ある人間の写真がどのように取られようと、その人間は同様のものであるのと等しい。」

なお、この論文における *Language* からの日本語訳中「」を附してある部分は意味の理解に資するため私の補ったものであることを示す。

(一九五六・四・二二脱稿、五・二七訂)